土流求及朝鮮等、所用之管皆長、而其製亦不聞如我邦屢改者、且也如和蘭人所用磁器而長管、其管頭通內之孔細小、而似防煙氣者、又有製煙葉法、先湯煠、而去其辛辣獰惡之氣、曝乾之數日、而後切爲縷、故其味至淡薄也、服之亦至一二吸而止、蓋彼方俗、凡百之制極精凝妙、有他邦之不可企及者、獨煙管不用巧、只磁器而不改者、義取之于不頻服邪、又見瓜哇、韃靼等煙管之圖、其長或及四五尺餘、夫他邦之管、用皆長者、爲其煙氣不能薰灼藏府、而有除瘴氣之功乎、其如是、而始可謂無害已、嗚呼八害之論不行、則請別立一法、先長其管乎、而十日一換、以要管中不生煙脂已、○略中庶幾世之嗜之者、亦當以余之所懼者懼焉、天明壬寅之春、玄澤大槻茂質識、

〔北窻瑣談後篇一〕備後福山の家中內藤何某といふ人、或時庭に出たりしに、烏蛇を見付たりしかば、杖もて强く打けるに、其まゝ走りて、草中へ入りければ、草の上より頻りに打て尋求けれども、つひに見失ひぬ、暫程へて、奴僕見當りて、草中に蛇死し居れりと告しかば、內藤出て杖もてかきのけんとしける時、其蛇頭をあげ內藤に向ひ、烟草の煙のごときものを吹かけゝるが、其烟內藤が左の目に當りて、蛇はそのまゝ倒れ死しける、內藤が眼俄に痛てはれあがり、寒熱出て苦惱言んかたなし、既に命も失なふべく見えし程に、內藤煙草のやにの蛇に毒なることを思ひ出して、煙管のやにを眼中に入れしに、やう〳〵に腫消し痛みやはらぎて、一日計に苦惱退き、眼赤きばかりなりしかば、日々やにを入れたるに、五六日にして全く癒たり、其翌年其時節、又眼痛出したるに、色々の眼科醫の治療を施しけれども癒ざりしかば、蛇毒の事を思ひ出し、又煙管のやにを入れしに忽ち愈たり、二三年も其時節には必目痛みければ、いつも其後はやにを入れて癒ぬ、此事村上彥峻物語なりき、又云、蛇を打し人は助右衞門と云人にて、毒に當りし人は、その庭に居合せし內藤なりとぞ、

〔茅窻漫錄下〕烟草